

〈連載〉

徒然文生噺

イラスト：山本悠、構成：服部円

第三段 「切迫した願い」

『文化と生物』というお題をもとに有識者が徒然なるままに寄稿する本連載。

今回は虫のフンから作るお茶『虫秘茶』の創業者である研究者・丸岡毅さんに寄稿してもらった。

私の頭上の形而上学

丸岡毅（研究者）

神はいると信じている。特別何かの宗教を信仰しているわけではないが、神はいることにしている。人類に共通の神というよりは、人ひとりに対して専属の神がついているというイメージだ。そして人に個性があるように神にも個性があるらしい。自分についている神はと言えば、そこそこ働くが少々天邪鬼で極端なところがあるようだ。短くない付き合いの中で徐々に分かってきた。いつも切迫した具体的な願いは叶えないくせに願ったことさえ忘れるほどぼんやりとしたものは叶えてくれる。たしかにあの時、誰にも真似できない珍しい生き方っていいよなと思った。願ったと言えばそうなのかもしれない。だからといって、ねえ、こんな形で叶えますか？ 望むところですけど。そうやって今日も頭上の神やらと対話している。

思えば初めて虫のフンを飲んでみたのも、ただ成り行きというには少々強引な巡りあわせだった。あの日、先輩は突然マイマイガを 50 匹も持って帰ってきた。木肌から大量の毛虫を剥がしてはタッパーに詰める間、何を思っていたんだろうか。うちの神さんが先輩の身体を乗っ取っていたのではないかとさえ思う。そのマイマイガのフ

ンを飲んだせいで、今こうして何者かであるような顔をしてエッセイ崩れの文を綴っているのだから人間には人生なんて分からない。

ともかく、虫のフンがお茶になった。それも得も言われぬほどの。それを虫秘茶と名付けた。まさに希望の結晶だと思った。小さくてコロコロと不安定で、眩く光っていた。それこそ最初はその軽さゆえに飛んでいかないよう握りしめて歩いた。いつも手の隙間から、惜しむように周囲に見せびらかした。不気味がられることもあったが、褒められることの方が多く、その度に手の中で膨らんでいくのが分かった。今やっと、たしかな質量を帯び、色づき始めている。一握の空間で収まらないそれは開いた両手の上で蠢いている。もはや握りつぶせなくなったそれを見て、共に生きていく覚悟を決めた。

どうか将来、虫のフンに埋もれながら笑って死んでいきたい。どう願えば叶えてくれるのか、神と自身と願いの距離を計りながら日々を生きていく。

**丸岡毅（まるおか・つよし）**

京都大学大学院農学研究科博士課程在学。研究室の先輩に影響され、修士2年の頃から昆虫愛（主にガ類）に目覚める。それから毎昼・毎夜のように“ガ”を探す日々が始まり、生活が虫一色に。ほどなくしてガの幼虫のフンが美味しいお茶となることを発見し、これまでに80種類以上の虫のフンを試飲。目指せ、虫のフンの人。2023年、「株式会社虫秘茶」設立。
<https://chuhicha.com/>

服部メモ

私が考える研究とは、世界にある現象に対して仮説を立て、実験をおこない、結果を分析し、ある一定の再現性をもってその現象に名前をつけることと考えている。丸岡さんは昆虫のフンの香りに着目し、その現象について研究しながら、商品にしてしまった。誰でも思いつきそうな、でも誰にでもできることではない。また、研究者のロールモデルとしては異端にも思え、かなり挑戦的なことをやっている。丸岡さんのやっていることを聞くと、これが本当に、真の研究だと感じる。まさに、神に導かれるように、やるべき人のところに研究はやってくる。